

工藤万里江『クィア神学の挑戦—クィア、フェミニズム、キリスト教』新教出版社、2022年

本書は、工藤氏が2020年度に立教大学大学院キリスト教学研究科に提出した博士論文に加筆修正したものである。1990年代に始まったクィア神学は、先行するフェミニスト神学や解放の神学の文脈の中で批判と対話を繰り返しながら独自の潮流となり広がりつつあるが、「それ自体が絶えず自身の枠組みを無効化していくような…決して固定されず、最終的な定義を拒むような動的な営み」である。そこで、カーター・ヘイワード、エリザベス・スチュアート、マルセラ・アルトハウス＝リードという代表的な三人の女性クィア神学者たちが「どのような神学を提示してきたのかを、『フェミニズム』と『クィア』の交差点に着目しながら明らかにすること」、そしてこの「思想群が、いかに多様で異なる視座や目的を持つものであるか、その一端を明らかにすること」が本書の課題として設定されている（11-12頁）。クィア神学とフェミニズム神学、さらにはキリスト教神学そのものの枠組みを問う、タイトル通り極めて「挑戦」的な研究である。

序章にあたる第一章「クィア神学の歴史と課題」は、「『クィア』という言葉の出自と現在の課題を整理し」、この「思想群の歴史を概観する。」フェミニズムとクィアの関係、クィアと神学をどのように繋ぐことができるのかという著者の問題意識と課題が明確に示されている。続く三つの章が本論にあたり、まず第二章「力としてのエロティック」では、レズビアン・フェミニストであったカーター・ヘイワードを取り上げる。「相互性」を実現しうる「正しい関係」を生み出し、人間がそれに参与する力の源が神であるとするヘイワードの神学について、その神学的意義と問題点を明らかにしている。第三章「キリスト教とはクィアなもの」では、ヘイワードに影響を受けながらも、性的アイデンティティに基づく神学（「ゲイ神学・レズビアン神学」）を超えてクィア神学を唱えたエリザベス・スチュアートを論じる。徹底した社会構築主義的立場からアイデンティティ・カテゴリー自体を脱構築し、本来キリスト教は「クィア」なものであるとするスチュアートの神学を通して「キリスト者」のアイデンティティとは何かという問いに至る。第四章「下品な神学」では、解放の神学・フェミニスト神学を徹底し、ポストコロニアルな視座からの神学的実践を志向したアルゼンチン出身の神学者マルセラ・アルトハウス＝リードを論じている。既存の覇権的な秩序・全体主義的なシステムからの神学（「T神学」）を放棄し、性的アイデンティティに基づく主体のみならず神学自体の規範性をも内側から無効化し、不適切・下品と考えられてきた人々の現実の中にこそ神学することの意味を見出そうとしたアルトハウス＝リードの姿勢に著者は大きな可能性を見出している。結論にあたる第五章「クィア神学者たちの挑戦」では、上記三人について①神・キリスト理解、②フェミニズムとクィア理解、③神学とその主体理解を比較考察し、クィア神学の課題と可能性を論じている。著者によれば「ヘイワードやスチュアートの試みは、人間イエスの生き方やキリスト教の教義が異性愛主義や家父長制の誤

りを証明しており、私たちが女であること、あるいは同性愛者やトランスジェンダーであることの『正当性』を保証していると主張するもの」である。しかし「主流社会からの受容やそこへの同化を求めるのではなく、むしろそれへの抵抗姿勢をあらわにした『クィア』の歴史を考えると、キリスト教における『権威』からの承認を求めようとしないアルトハウス＝リードの姿勢はより『クィア』の成り立ちと合致」しており、この「絶えざる主体の不安定化と規範への抵抗を志しながら、なお『共に生きる』ことを手放さない」姿勢に著者はより大きな重要性を見出し、読者にその実践のあり方を課題として問いかけている(285-287頁)。

クィア神学は現代神学の最前線のテーマの一つと言えるが、著者はその複雑多様で現在進行中の議論に対して、各神学者の①思想的背景と問題意識、②思想・神学的位置づけ、③先行研究と批判的考察という整然とした構成で、錯綜する思想を多方面から検討して丁寧に読み解いている。本書はクィア神学を、現時点で理論面で総括する日本で最初の単行書である。実践面では堀江有里『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版、2015年、聖書学では小林昭博『同性愛と新約聖書—古代地中海世界の性文化と性の権力構造』風塵社、2021年、等の注目すべき労作があるが、神学の枠組みを挑戦的に脱構築しようとし、それ自体が「規範に対する抵抗」として体系化を拒むこの思想群を包括的に比較考察し、理論的に提示しているこの業績は刮目に値する。本書が扱う三人は「『クィア神学』を考察する上でかくも重要な神学者たちであるにもかかわらず、彼女たちのこうした違いに注目して比較した研究はまだなされていない。」(16頁)その観点でもこの著作の独創性は際立つ。三人の神学的特徴と違いを明確化し、論述も柔軟かつ明晰で読ませる筆力がある。著者は自らの立場を自覚的に省みるとともに、「抑圧的な規範に抵抗」し「互いの差異を強く認識」しつつ、なおも「共に生きる」という困難な課題を引き受けようとしている。クィア神学が志向するキリスト教神学自体の脱構築がキリスト教及び神学に何を齎すのか、それをどのように評価するかという課題が残されているが、これに対しては本書の問いかけを受けた学会員一人一人が自らの責任で応答を試みるべき事柄であろう。

以上の理由から、2024年度日本基督教学会学会賞選考委員会は、本書を今年度の学会賞に推薦する次第である。

日本基督教学会学会賞選考委員会

委員長 須藤伊知郎

委員 釘宮明美、中道基夫、西原廉太、小友聡、竹田文彦